

## 私の戦争体験記

関東軍の大移動「み」号演習に依る第四独立守備隊の編成替え

坪野 秀雄（大正 12 年生まれ）

留守を召集老兵さん方に託し昭和 18 年 12 月、間島省函門の原隊を後に朝鮮釜山港迄南下し、12 月 14 日、貨物船改造の輸送船良洋丸にて出航する。船団は輸送船 4 隻と護衛の駆逐艦 3 隻で大分県の佐伯港に寄って濃紺色の太平洋上に出る。この頃既に米軍の潜水艦が近海に出没していたらしく、後にきいた話だが、我々の前後の船団が相当の被害を受けたとか、精鋭関東軍の南方及び千島方面の移動妨害である。

厳寒の 12 月満州を完全冬装備で出たのが洋上 1 週間もすると次第に頭上が暑くなり、急遽夏支度に服装替えとなる。途中トラック、ポナペ諸島に寄港しながら、航海 20 十日間にて絶海の孤島赤道直下、東カロリン群島のクサイ島に昭和 19 年 1 月 3 日、同船団日蘭丸の兵員を合わせ約 5,000 名の部隊と戦車、車輛、兵器、弾薬、食糧と一切の陸揚げが終わり、ここにクサイ島南洋第 2 支隊の上陸が完了したのである。

この頃既に戦況は悪化の一途にあり、我が島にも早々の米機の来襲を受け兵舎、港湾施設の爆撃で戦死傷者 10 数名の損害を受け、制空、制海権は完全に敵の手中となった。

以後、陣地構築にかかるも持参した糧秣は 2 か月余しかなく本土からの補給の見込もたたず、甘藷作りの両面作戦となる。

現住民の食糧果物の徴発は一切禁じられているため、兵員の疲労と食糧不足が益々深刻となり、苦肉の策として野草や木の芽、海へび、トカゲ、野鶏、ナマズ、ネズミ迄もと手当たり次第が食糧になる。畑作は追いつかず、遂には栄養失調症から死者も出る悲惨なものとなる。

一方米軍は毎日の様に椰子の木すれすれの偵察飛行と機銃掃射、艦砲射撃も毎日に頻度を増してくる。一方中南部太平洋上ではガダルカナル島を始め、アッツ、キスカ、マキン、タラワ、クエゼリン、テニアンと、グアム島は 19 年 8 月に次々と玉砕の報を聞くも、我がクサイ島には敵の上陸はなく、最悪の流血を免れた事は不幸中の幸いとはいえ、前述の栄養失調症による戦病死者が 380 余名にも及んだのである。

既に独、伊が降伏し最後にソ連の不可侵条約破棄により満州が 1 週間にて全滅したときく。明治時代の日清、日露の戦争に神国日本が最後は「神風」によって勝利を得たとの事は当時の学校教科書にもあり、我々青年兵士も神風を最後の頼みにしておったのは虚言ではない。「石に立つ矢」、所謂「神国」の逸話はこれにて幕となる。

いよいよ我が島にも昭和 20 年 8 月 15 日南方司令部より戦闘中止、敗戦の入電があり暫時武装解除され、9 月 8 日、米艦上で降伏の調印式が行われた後、島本土に星条旗が上がる。

この時の感慨は筆舌に尽し難く、日本軍人が拳骨で泣いたのはこの時であった。昭和 20 年 11 月 5 日、病院船氷川丸（15,000 トン、現横浜市山下公園に観光船として繋留）が来島し、患者 150 余を乗せ、第 1 便が本国に向かう。まるで骸骨が軍服を着ているみたいと、「かま

くら春秋社 氷川丸物語』。続いて本隊は11月19日、高栄丸<sup>こうえい</sup>にて在島約2年、名残多きクサイ島を後に全員帰国の途<sup>と</sup>に、本隊の兵員も患者との名目<sup>な</sup>はつかないものの半分以上が栄養失調症であった。帰りは速力も早く10日にて三浦半島の浦賀港<sup>うらが</sup>に11月29日入港し、2日間程かかって諸手続きを終了、帰省旅費<sup>きせい</sup>の支給を受け、戦友と別れを惜しみながら昭和20年12月3日、我が家に帰る。私は8年ぶりの帰国であったが長兄はガタルカナル島にて、次兄はビルマ戦線にてそれぞれ戦死ときき感涙<sup>かんとらい</sup>の極<sup>きわ</sup>み、今回の戦争は果たして何であったのか改めて思い知らされたのである。